

# 平成 24 年度 一級建築士設計製図試験の講評

## 「地域図書館」（段床形式の小ホールのある施設である。）

### <試験前に勉強したこと>

最初に練馬図書館を見学した。200 m<sup>2</sup>弱の中庭があり、自然採光のすばらしさを教えてくれた。小ホールは 300 人収容の大きさで、エントランスよりすぐにアプローチできた。閉架書庫は地下室に設けられていた。敷地の大きさが試験で想定されるものであった。これを参考に中庭案を 2 課題演習した。しかし、敷地に対する負担が大きかったため、これを 120 m<sup>2</sup>以上の吹抜空間に置き換えた。19 世紀に建設された大英博物館の円形閲覧室では、天窓から採光するドーム天井の下で 2 万冊の本の壁に囲まれている。現在の図書館の閲覧室は書架の高さが 2 m あり、それによって閉ざされた空間となる。しかも時代は自然光による省エネ、脱原発であれば、開架閲覧室の上部に吹抜を設けることは有効と考えた。それ以後、コスモ建築塾の案はすべて吹抜案を採用した。

次に小ホールであるが、試験では階数指定はしないであろうと予測した。この階数を決定する有効な方法として、課題文の床面積の上限を 7 m スパンで割り付け、延べ床面積を求める。小ホールを 2 階に設け、その上限近くで納まれば、そのまま OK として進める。この手法で、小ホールの設置階を判断するのが最も簡単で自然と指摘した。

敷地図は、北・西が公園の問題もやったが、この場合は公園側が表になると考え、道路側が管理ゾーンになると指示した。

最後の予想としては、数々の情報より判断したが、貫通通路を取り上げた。コスモ建築塾でも 2 案演習していたが、情報に基づく案は過去問にないものであった。即ち、貫通の位置が端から 2 スパン目に作られていた。これは一般開架と児童閲覧を含むと面積が大きくなるためである。これは過去問にはないタイプなので、非常に濃いと指摘した。

### <試験問題について>（項目ごとに説明する）

- ・全体のスパン割り（試験前に 7 m スパンで割って、困った時に部分的に修正するように指示）  
7 m スパンで割ると、4 × 6 コマとなる。これに 150 m<sup>2</sup>の吹抜を加えると、床面積の合計は約 2,200 m<sup>2</sup>の建物となる（これでスパン割りは終了）。東側に 6 m の空地が残るが、これはサービスヤードとして残す（試験前に指示）。このスパン割り以外は間違いとなる。なぜなら、建ぺい率が厳しくて、50 m<sup>2</sup>しか余裕がないため。
- ・吹抜空間について  
150 m<sup>2</sup>以上の吹抜とあるが、部屋の指示がない。しかし 150 m<sup>2</sup>以上の吹抜が設けられるのは、一般開架スペースの上部以外に考えられない。
- ・貫通通路について  
貫通通路の位置については東側から 2 スパン目に設けるのが正しい。交差点に近く、北西の公園側に 600 m<sup>2</sup>程度の閲覧スペースが設けられ、児童閲覧室を含めベストの形となる。しかし、管理ゾーンの一部を 2 階に設けることになる。  
もう一つの案は、西側から 2 スパン目に設ける案だが、これは児童閲覧室が 2 階になり、欠点大きい、管理ゾーンは 1 階にまとまる。
- ・地階について  
200 m<sup>2</sup>程度の閉架書庫が求められ、継続して作業が行われるとなれば居室となる。従って、200 m<sup>2</sup>以上となると、2 方向避難が必要となり、2 階が必要となる。

### <試験終了後の感想>

非常に緻密な問題であった。私の講師歴 20 年の中で最も優れた問題だったと思う。これだけの内容を完璧にこなす力を養成するには、1 年程度の訓練時間が必要だと思う。

試験の内容については、ほとんど対応していたが、地下に閉架書庫を設け、断面図を書かせることには驚いた。これはノーマークだった。練馬図書館で見ただけに、このコンセプトを演習出来なかったことは、私の未熟と言わざるを得ない。この構成は過去 20 年で初めてである。よく考えるものだと思う。